

東日本大震災から、早くも2年。2度目の冬を被災者は、どのように過ごしているだろうか。長引く仮設住宅暮らしの中で、凍てつく戸外へ出られず、閉じこもりがちなお年寄り。運動場や遊び場が乏しく、体力と気力が低下する子どもたち。住宅や個人の生業再建への道筋が見えず、大人たちにもいら立ちが募る。一方で、自ら復興を目指す地元や被災者が主体のNPOなどの動きが、目立つようにもなってきた。明日を模索する人々の努力を、JKAが補助する復興支援の現場に訪ねた。



NPO法人さんさんの会
被災弱者に「健康なおかず」
手渡しの配達で見守り続ける



「キッチンハウス」の厨房で、配達用におかずを小分けする

凍りついた雪に覆われた、日暮れ時の仮設住宅。お惣菜のバックを手にした若者が、静まり返った室内に声をかける。「××さん、今晚は！」。人の気配がすると、ひとまずホッとする。「今日はどうしてたの?」「船、借りられたんだって? 漁に出た?」……岩手県大船渡市のNPO法人「さんさんの会」では、被災者80人余りに夕食のおかずを手渡しで届け、日々の暮らしの見守りを続けている。

震災直後、市内のレストラン店主が、津波に流されなかった有り合わせの食材を調理して、避難所に配って歩いたのが、活動の始まりだった。その後、店のお客や友人、料理人仲間などが協力して、ピーク時には1日2400食を調理・配達した。

やがて避難所が閉鎖され「とりあえず食べる」とから「生活再建」への模索が始まる中、配食サービスの対象は取り残される生活弱者へと絞られてきた。その多くは津波で家族や仕事、健康、そして生きがいを奪われた孤独なお年寄りたち。「なすこともなく、仮設住宅に引きこもりがちになり、インスタント食品を食べ続けて体調を崩したり、最

悪の場合亡くなったり、2次災害と言える状況があります」と菊池真吾代表は語る。
長期的な支援を続けるため、2012年、若手のメンバー6人でNPO法人を立ち上げ、建設資材メーカーに勤めていた菊池さんを中心に、ほとん



仮設住宅にお惣菜を届ける

ギリギリの家計でも手が届くように、市販品のほぼ半値に抑えているが、それでも苦しいという人には、見回りサービスのツールとして提供する形をとっている。

「いずれにせよサポートを打ち切ることではできません。せつかく助かった命をまた危険にさらすわけにはいかない」(菊池代表)。将来は、事業として自立させたいという夢を抱きながら、当面の事態の打開へ、会は新たな支援を求めている。

さんさんの会(0192-474222)

国立大学法人・筑波大学体育系
2分間の楽しい音楽と体操で
小学生の体力と気分向上を

岩手県釜石市内の沿岸部にある唐丹とうたん小学校。津波の被害で校舎が使えなくなり、中学校の校庭に間借りしてプレハブで授業をしている。全校65人の児童は、校庭が使えず、放課後もバス通学のために時間がなく、十分に運動ができない環境。体力低下や肥満が心配されている。そこで、身体と心を同時に元気にするプロジェクトを、JKAの補助を受け

て実施しているのが、筑波大学大学院人間総合科学研究科体育系の研究室だ。「身心統合スポーツ科学」の研究成果を生かし、スポーツとアート(音楽)を組み合わせた「SPARTS」と呼ばれるプログラムを唐丹小学校のために設計、先生方と協力して取り組んでいる。



体育館に集合した唐丹小学校の児童たち

具体的には、オリジナルの軽快な音楽と、それに合わせて考案された2分間の体操を、体育の時間に週2、3回実施する。「ジャンプ体操」と「きびきび体操」の2種類があり、正しい運動技能の習得により跳躍力と敏捷性の向上を図れるという。プロジェクトリーダーの征矢英明教授や音楽や体操を考案した菊池章人研究員は「普段の授業を邪魔しないために、また繰り返しやるのが苦にならないように、2分間という短さが重要でも、テンポをあげてやると2

リングリングプロジェクトを訪ねて



ど「手作り」で拠点施設「キッチンハウス」を建設した。おかずのメニューは、浜松市の管理栄養士グループと共同で作成した、塩分・カロリーを抑え栄養バランスの取れた人工透析対応のお惣菜3種の調理済みの製品を、キッチンハウスの厨房で分包、真空パックにして配る。パートの作業員として、仮設住宅の被災者も働いている。時の経過とともに、活動を支える寄付や助成金が減少し、苦境が続く。

リングリンクプロジェクトを訪ねて



「原発周辺や福島県北部の町村ほど」

東日本大震災後1年を経た2011年から力を入れているのが、茨城県と隣り合う福島県いわき市で、原発事故による放射能汚染のストレスにさらされている、子供たちと親への支援だ。

ひたちNPOセンター・with youは、地域の住民活動をバックアップする中間支援団体。組織運営のノウハウを伝授したり、活動に協力できる関係団体や企業のネットワークを作ったりしながら、茨城県日立市を中心に、遊休農地を利用した貸し農園の運営など、市民主催の身近なプロジェクトを後押しし、200人以上のボランティアを育成してきた。



ボランティアのお姉さんとゲームを楽しむ幼稚園児

その間、親たちは、ショッピングセンターで買い物をしたり、懇談会でお互いの悩みを話し合ったりして命の洗濯。「夫婦揃って買い物なんて本当に久しぶりでした、とうれしそうなお嬢さんもいました。子供も大人も、誰もが当たり前のように暮らを取り戻したいのです」と安田代表。

当日の主な実働部隊は、常磐大学など地元3大学の学生や教職員、一般市民のボランティア。漠然と参加す



るのではなく、催しに先立って打ち合わせを兼ねた「ボランティア講座」を受講し、力量を蓄えてもらう。プロジェクト終了後は、関係者でシンポジウムを開き、今後の支援活動の糧となる報告書も作成される。

放射能汚染のストレス和らげる子どもと親の心のケア

には知られていないのですが、茨城県のすぐ北にあるいわき市から、たくさんの方が県内に避難していました。ボランティアで被災地のお手伝いや調査を行う中で、帰還後も外遊びも控え、線量計を見ながら、毎日の食べ物にも神経を失らせている生活が続く親子たちに、心のケアが必要なことを知りました」（安田尚道代表）

「子ども元氣プロジェクト」では、いわき市内の幼稚園2園と、発達障害児の親子グループを招き、それぞれ3回ずつ、茨城県内でレクリエーションを催した。

各回、子供たちには屋外遊びや工作、ゲーム、バーベキュー、障害児には自転車や水泳練習などのプログラムを用意。まる1日、思い切り体を動かして遊んでもらう。



身体を思いきり使って外遊び



2分間のジャンプ体操で、跳躍力も気分も上向く

分間でも相当な運動量になります。運動と脳は繋がっていますから、気分もポジティブになります」という。

プロジェクトチームでは、開始前の昨年11月に子どもたちの体力測定とメンタルヘルスチェックを行った。子どもたちの気分が「疲れやすい」や「いらいらする」などの気がかりな傾向がみられたが、プログラム終了後には改善がみられることを期待して、再度体力とメンタルの測定をする予定という。

東京の下町で被災地の産直ショップ

NPO法人 かまいリンク 代表 遠藤ゆりえさん

2012年末の1カ月「日本一元氣な商店街」と言われる東京都品川区の戸越銀座の貸店舗で、故郷釜石市の産品を直売するアンテナショップをオープンさせた。海外留学先で震災の発生を知り、帰国して家族と再会できたのはその夏。避難所や仮設住宅で暮らしながら、釜石の「生業(なりわい)」復活の黒子を務めようと、NPOを立ち上げた。



郷土芸能の虎の頭をプレゼントされて喜ぶ遠藤さん

INTERVIEW

—NPOのメンバーは20代から30代の若手中心。もともとのお知り合いですか？

「必ずしも。震災の直後は、支援の人も被災者と一緒に、色々な人が色々な場面で助けて暮らしました。その中から、同じ思いの仲間が自然に寄り集まった、という感じですね」

—どんな思いでしょう？

「支援物資を配るばかりでは、立ち直ることは出来ない。地元の産業が元気になって雇用を確保しないと。釜石で盛んだった水産加工業は、やっと生産を再開した所もできてきましたが、取引先を失ってしまいました。販路の開拓や宣伝をする時間も経験もない。まずは、そのお手伝いから」

—戸越銀座はその一歩。東京の下町体験はどうでしたか？

「お向かいのお店の人が、毎朝の準備を手伝ってくれたり、お隣さんが自転車とか気軽に貸してくれたり。毎日来店してクチコミでお客を増やしてくれたおなじみさんとか、チラシを作ってくれたデザイナーさんとか……地元の方々、本当に気さくで親切でした」

—売り上げは？

「家賃や人件費がJKAの補助で賄えて、約80品目を扱った売り上げの100万円を生産者に還元できました。また、お客様の紹介で東京のお店に納入できそうな商品もあります」

—課題も見えてきたそうですが。

「小売りには工夫が必要ですね。業務用なら大きな袋に『ふのり』とか品物の名前だけ貼ればいいけれど、調理法を添えたり、使いやすい分量にしないと。そんな事一つ一つを、フィードバックできれば」

—お客様には東京在住の釜石の人も？

「そうなんです。郷土芸能の虎舞の張子の面を、お店に飾ってください、とわざわざ持ってきてくださった方もいて。思わず涙が出ました」

—お店は発見と出会いの場ですね。

「イベントへの出店や、震災体験の話を知りたい、という依頼が何件も来たのは嬉しいことでした。戸越銀座の商店会からも、是非またおいで！と……。今年は、そうした情報発信や交流、海外との商談などにも、活動を広げていきたいと思っています」

視覚障害の音楽家にスポットライト ハンディを越える挑戦の場に

2012年の師走、東京都杉並区で「羽ばたけ視覚障害音楽家たち」と銘打った恒例のコンサートが開かれた。タイトルの通り、視覚障害を持つ若手の音楽家たちにスポットと当てる場として、大学進学や就労など、視覚障害者の社会参加を後押ししてきた「視覚障害者支援総合センター」（高橋理事長）が企画、10年目を迎える。

昭和20年代、盲学校で学んでも、鍼灸や箏楽くらいしか視覚障害者の職業が認められていなかった時代に、大学進学の道を切り開き、点字新聞の記者として働いてきた高橋理事長は、コンサートの趣旨について、こう語る。

「実力の世界の芸術に障害の壁はない、という考え方は確かにあります。しかし、対等のポジションに至るステップとして、チャレンジの場を少



リハーサル中の網川泰典さん

この日のメインプログラムは、フルートの網川泰典さんと、ソプラノ独唱の橋本夏希さん。

学生時代からコンクール受賞や海外での演奏経験も豊富な網川さんは、ソリストとしての十数年のキャリアを重ね、このコンサートでは先輩格だ。「当たり前ですが、楽譜を見ながら吹けない、というのはハンディですよね。音大でも、実技は暗譜で、講義は最前列に座って、友達に声をかけて板書を読んでもらったり。パソコンのない時代だったから、必死に点字でノートをとったり」。クラシックだけでなく、様々なジャンルのミュージシャンとライブ共演、演奏の幅を広げる。「今も毎日が大変。仕事を下さい！です（笑）」。

一方、橋本さんは、東京芸術大学の修士課程に在学中。声楽科では初めての視覚障害学生だ。古典派が大好



きな端正な歌声で「メサイア」の学内演奏ソリストが憧れ。子供好きで「学校の先生になりたい」という夢もあるが、障害を持ちながら声楽との両立は困難も予想される。いよいよこれからが、人生チャレンジの山場だ。



橋本夏希さんのステージ

機械工業振興——群馬県立産業技術センター（東毛産業技術センター）

光のエネルギーや広がり測定 新しいLED照明開発を支援



全光束測定システム。
二つに割れるように開く球の中心に
照明器具をセットし、計測する

リングリング プロジェクトを 訪ねて



群馬県立産業技術センターの附属機関である東毛産業技術センター。主に県内の太田、大泉、伊勢崎の企業を支援している。中島飛行機製作所以来の物づくりの伝統を引き継ぎ、自動車関連の機械金属工業や電気機器、輸送機器などを扱う中小企業が多い地域。「日本全体が不況に悩むなか、比較的元気を保っているのではないでしようか」と小畑剛志センター長らスタッフが胸を張る。

その地域をさらにバックアップするために、2011年度JKA補助事業で導入されたのが「全光束測定システム」と「大型配光測定システム」。どちらも新しく照明を設計したり設置したりする際に必要な基礎的データを得るための装置で、近年、新型のLED照明に参入する企業が

増えていることに呼応している。

「全光束測定システム」は、直径2メートル、中空の「積分球」と呼ばれる装置の中心に照明器具を置き、そこから出るすべての光の明るさを測る装置。照明器具の放射する光エネルギーの総量や、光色（色温度）などを測定し、従来の照明器具との比較が可能になる。蛍光灯のLED化などに役立つという。

「大型配光測定システム」は、照明器具から放射される光の角度ごとの強さを測定し、光の空間的広がりを把握する装置。コンピュータ制御されたミラーと、ミラー中心から約20メートル離れた受光部を結び「暗室トンネル」からできている。LED照明が従来の光源と比べて同等の広がりを持っているか確認した



大型配光測定システム。
光源の光をミラーで反射し、
約20メートル離れた受光部で計測する

り、照明の効率化で省エネを図ったりする際に有効という。

導入以来、1年弱の期間で「全光束測定システム」は200件「大型配光測定システム」は132件の依頼試験に対応した。企業との共同研究の中から、新しい自動車用前照灯やデザイン性を重視した照明器具の開発が試みられている。これらの設備は近県での導入は初めてで、新潟、長野、埼玉など県外の企業の利用も増えている。群馬県立産業技術センターでは、上信越公設研ネットワーク等に参加し、各地区の産業技術センターなどが持つ設備、技術力、支援力を連携させる試みを進めている。